

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



雪村展

戦国時代のスーパー・エキセントリック

年頭に思う

新年明けましておめでとうございます。

お蔭様で千葉市美術館も七度目のお正月を迎えることができました。ラッキー・セブンという言葉がありますが、どうか幸運の年となりますように、皆様の益々のご愛顧、ご支援をお願い申し上げる次第です。

さて、本年冒頭の特別展は、「戦国時代のスーパー・エキセントリック」と言う副題を付けた「雪村展」です。雪村とは、「せっそん」と読む画家で、16世紀の関東で活躍した異色の水墨画家です。有名な雪舟が亡くなった頃に生まれ、直接的な師弟関係はありませんでしたが、その画風を慕い学んで、独自の作風を切り拓いていった個性的な存在です。

ポスターやちらしの絵柄に選ばれた「琴高仙人図」は、仙術を使い鯉の背に乗って現れるという中国古代の仙人を描いたものです。鯉をまるで水上バイクかオートバイでも乗りこなすかのような姿勢で颯爽と水中から現われた琴高仙人は、雪村という唯我独尊の画境を追及し続けた自由人の自画像と見ることも許されるでしょう。決まりきった絵画の約束事にとらわれず、思う存分に好みの図像（イメージ）を独創し、それらをダイナミックな画面構成にまとめてしまった腕力の強いこの画家に、「戦国時代のスーパー・エキセントリック」という尊称（？）をたてまつったのは、今回展覧会の監修をお願いした山下裕二さんです。鋭い美術評論で知られる山下さんは、琴（こと）の演奏の名手としても知られ、やはり琴（きん）を善くしたという琴高仙人にもともと親しみを感じていたことでしょう。それと同時に、わずらわしい日常を振り切り、気持よさそうに水から飛び出すその図柄に、深い共感を覚えたのだと思います。「琴高仙人図」に託したこの雪村展のコンセプトが、はたして会場でのような展示となって表わされるのか、山下さんならではのお手並のほどを、準備段階にある今から、私も観客の一人としてわくわくと期待しているところです。

*

新年早々に来年以降のことを話題にしますと、気の早い鬼に笑われてしまいそうですが、近い将来に、かねて待望の「天津市芸術博物館所蔵中国美術名品展」（仮題）が実現する運びとなりました。中国の天津市は、千葉市が友好都市として注目を集めている世界七都市の一つで、かねてよりスポーツや芸能などの文化交流を通じて親交を深めてきました。人口は一千万人を超え、首都北京に近い中央政府直轄市である天津市には、その重要な都市としての格にふさわしい立派な収蔵品を備えた

美術館があります。近年ようやく成熟の度を加えてきた当館としましては、友好都市間との美術交流を進めていく希望をかねてより抱いていましたが、まずその第一歩として隣国の天津市との間で実現することを望み、接触を試みたのでした。一昨年夏の表敬訪問に続いて、昨年の暮には具体的な提案と主要な絵画作品の調査のために、二度目の訪問をしてきました。幸いに、天津市当局と芸術博物館の皆様の好意的な歓迎を受け、私ども

の申し入れに対して友好的な配慮を加えて下さることを確約して下さいました。監修をお願いして同行していただいた中国美術史専攻の小川裕充さんも、同館所蔵の中国絵画が質が高く、楽しめる内容のものであることを確認することができ、大きな手応えを得て下さったようです。できれば来年の秋にも、絵画作品ばかりでなく、書跡や陶磁器、玉器や文房具、それに天津市に伝わった民衆的な美術である泥塑（精巧な泥人形）や年画（正月用の絵画）なども合せた総合的な中国美術展を、天津市から千葉市への友好の贈り物として開催させていただく予定です。どうかご期待下さいますように。

*

私が館長として就任して約三年になりますが、その間に物足りなく、また淋しく思われたのは、小・中学生や高校生など、少年、少女の姿があまり館内で見かけられないということです。美術や音楽など、感性に働きかけるところの多い芸術は、幼い時期から直接触れ、みずから体

験してもらう必要のあるものです。学校の先生やご両親など、大人の方々に手を引いていただき、あるいは魅力を伝えて誘っていただかなければ、彼らも美術館に来るきっかけがつかめないことでしょう。日本や千葉が風格のある国や都市となるために、明日を担う世代が知性ととも感性を磨く必要を、痛感させられるのです。どうか若い人、幼い子たちを連れて美術館にいらっやっして下さい。私たち館員一同もそのための方途を探り、実作に移せることから試みていこうと、心を新たにしているところです。

つねに足元を見つめ、我国の文化の伝統を探り、今日と明日の創造に糧となるよう、そしてまた外国との交流にも絶えず心を配って、市民のための美術館としてお役に立てることを、年が改まったいま願ひ思うことしきりです。

どうぞ本年もよろしくお願い申し上げます。

館長 小林 忠



雪村周継《琴高群仙図》(3幅対のうち中幅の部分) 京都国立博物館蔵

雪村の作品の変遷とその魅力

室町時代の末期に登場した雪村周継は、関東から東北にかけて活躍した画僧である。西国の雪舟が没した頃に、入れ代わるように東国に登場したのが雪村で、16世紀後半期に至るまで数多くの作品を残した。これらはいずれも個性的で魅力あふれるものばかりだが、その生涯については必ずしも明らかでない。

雪村が何時生まれたかについては、正確にはわからない。雪村の作品は異常なほど多いのだが、これらには雪舟のように年号の紀年と自らの年齢を併記したものがなく、また生誕年を明らかにする同時代の史資料も残されていないからである。紀年のある作品としては、たとえば天文19年（1550）に描かれた小田原早雲寺の開山の「以天宗清像」、また（天文24年）の円覚寺の景初周随賛「叭々鳥図」の例があり、更に後世

の谷文晁の『集古十種』等には、永禄6・7年（1563・1564）の牧谿や玉澗に倣った「瀟湘八景図巻」が掲載されている。これらのことから、ほぼ16世紀半ばから後半にかけての雪村の活躍年代を想定することはできる。一方で年齢が記されている作例では、71歳の「竹林七賢図屏風」や82歳の「瀟湘八景図屏風」な



雪村周継《琴高群仙図》 京都国立博物館蔵

どがある。これらから雪村が長命であったことは理解されるのだが、肝心の生誕の年については明らかにすることができない。

昭和8年福井利吉郎は、雪村について初めて体系的に論じた『雪村新論』を発表し、ここで永正元年（1504）生誕説が示された。これはかなり説得力ある推論なのだが、しかし近年は赤澤

英二氏によって明応元年（1492）と遡った説が提示されている。雪村の作品の様式展開からみれば、赤澤説が有利に思えるのだが、この二人の説にしても直接の資料に基づいているわけではない。そのため今の時点では、1500年前後に雪村は誕生し、16世紀後半80歳余まで活躍したとするのが妥当な年代設定と思われる。

一方雪村の生涯の動向の解明については、近世に入ってから『丹青若木集』や『本朝画史』など画伝史類の資料を基にして、福井の『雪村新論』での研究が大きな役割を果たした。また更に戦後の新たな作品の発見や研究もこれに加わり、今では雪村についての大まかな概要が明らかになりつつある。これらによれば、雪村は常州部垂（茨城県大宮町）に戦国大名佐竹氏の一族として生まれ、近くの正宗寺（常陸太田市）で修行し、またここで画業にも励んだと思われる。雪村の初期の時代にあたり、正宗寺での「滝見観音図」が起点となり、中国絵画とくに院体画を学び、また清新な表現の「楊柳水閣図」などとともに、「風濤図」など個性的な作風も現れた時代である。この後は会津（福島県）の豪族輩名盛

《花鳥図屏風》 ミネアポリス美術館蔵



氏のところへ旅立ち、また小田原から鎌倉へと巡って以天宗清や景初周随らの禅僧と交わり、更に北条氏とも接触したと思われる。この時代には「琴高群仙図」や「竹林七賢醉舞図」、「瀟湘八景図巻」また「波岸風」など本格的な作品が生まれたが、とくに鎌倉、小田原の時代に牧谿や玉澗を学んだことは大きい。この後は再び会津へ戻り、またおそらくは常州へも往還したが、晩年は奥州の三春（福島県三春町）に隠棲した。この時期は雪村のもっとも精力的な時代で、「花鳥図屏風」や「釈迦・羅漢図」及び「呂洞賓図」、更に「山水図屏風」など雄勁な表現の大作、傑作が続々と生まれ、一方で「蔬果図」など写生的で好ましい作品も描かれた。そして最晩年には策彦周良賛「渡唐天神図」や「自画像」などの繊細な表現へと変化し、更に自由な「瀟湘八景図屏風」へと続くわけである。これが雪村の生涯におけるおおよその道筋であり、作品の変遷の過程であったと思われる。またとくに部垂の近く下村田には、雪村筆洗いの池や雪村屋敷の伝説が残り、更に三春の李田には、近世に再建されたものだが雪村庵が残されている（現在の行政区域では郡山市西田町字雪村）。これらはいずれも雪村の具体的な活動を今に示しているといつてよいだろう。

つづいて雪村画の魅力はどこにあるのだろうか、これを先人たちの作品評でたどってみよう。まず先にあげた『丹青若木集』は、雪村を評して「新意を出し、悉く異体を専らとし、一家法と爲す」と記している。またこれよりやや遅れて『本朝画史』は、雪村が雪舟の筆法を慕いながらも「大抵略して新意を出す、用いるところの筆は狂逸にして奇思あり」と評した。いずれも雪村の絵が他の画家と較べて際立って個性的であること、また奇想に富んでいたことが近世の画伝史では強調されている。

また近代になってからは、岡倉天心が『東洋の理想』の中で雪舟と比較しながら雪村画について次のように述べている。

雪村には禅の理想のもう一つの本質的な特徴をなす自由でこだわらぬ軽みが生きている。この画家にとっては、あたかも生活の一切が遊びにすぎぬかのようで、雄勁な自然の溢れて止まない力のすべてを、その強健な精神によって味わい、楽しむのであった。

（佐伯彰一訳 『岡倉天心全集1』）



《列子御風》



《竹に雀》個人蔵

天心のこのような評言は、雪舟の作品と具体的に対比させるとより一層明確になる。たとえば雪舟の「四季山水図」や「秋冬山水図」に対して雪村の「夏冬山水図」或いは「風濤図」、雪舟の「慧可断臂図」に対する雪村の「呂洞賓図」や「琴高群仙図」など、いずれも雪村の作風が著しくバロック化されて、また画面もドラマチックに構成されており、とにかく見て楽しく面白いことが理解されよう。天心は雪村に関してとくに思い入れが強かったようで、『東洋の理想』に先立つ東京美術学校での講義『日本美術史』では、雪舟とほぼ同等のスペースを割いて雪村について論じている。このような天心の「雪村好き」は、狩野芳崖や橋本雅邦にも伝染したが、一方で『東洋の理想』より少し遅れて出版されたフェノロサの『東洋美術史綱』とはちょうど対極にある。フェノロサは、雪舟については詳しく論ずるが、雪村については意外なほど素っ気なかった。

福井利吉郎の『雪村新論』は、初めて雪村について体系的に論じて画期的であったが、そこでは雪村画の魅力についても情熱的に語られている。少し長いが一部を引用してみよう。

其の一小幅にも潜められた大自然の偉大なる「力」、無限より無限に流れるものゝ如き「動き」、人間的な「親しみ」、童心其物の無邪気さと超人間的な仙骨 是の如き風神気骨は雪村以外の何人のもので無く、一紙の布景にも一点の落墨にも雪村一家の面目が躍如としている。彼れの好んで描く竹林七賢の隠は多く奚童を伴っている。然し画中の人物は悉く童心、悉く天真爛漫、童兒と老翁と何等の差別を見ないのである。是の如き特異の世界を創造し得た人が、彼れ自身真に飄々乎たる神仙中の人であつたのは云ふ迄も無い。

このような雪村画に対しての福井の評言は、『雪村新論』の各所に相似た言辞で登場している。この中でたとえば「其の一小幅にも潜められた大自然の偉大なる「力」」は、おそらく「風濤図」を念頭においたものだろうが、これの先駆的な作品「瀟湘八景図帖」にもすでに現れている。また「画中の人物は悉く童心、悉く天真爛漫、童兒と老翁と何等の差別を見ない」のは、まさに「竹林七賢醉舞図」を思わせて楽しいが、「布袋唐子図」や「寒山拾得図」など、雪村が描く道釈人物には随所に見られる魅力といつてもよいだろう。福井のこれらの雪村画の評は、天心のそれを更に具体的に展開したものだが、近年はまた辻惟雄氏が、



直に絵を鑑賞し楽しむ外国の人たちに好まれ、明治以降の雪村画の海外流出の原因になったとも考えられるが、今回それらが里帰りするのもまことに喜ばしい。

今般千葉市美術館で開催される雪村展では、「戦国時代のスーパー・エキセントリック」とサブタイトルが付いている。『本朝画史』の「狂逸にして奇思あり」を思い起こさせるが、実際に雪村の作品をしてみるならば、このタイトルもあながち誇張ではなさそうである。

東京学芸大学教授 小川知二

《猿猴図屏風》メトロポリタン美術館蔵

『日本美術の見方』の中で『東洋の理想』での天心の雪村評「プレイフルネス」(遊び)という言葉に触れ、これが日本美術そのものの特質の一つであるとも論じている。

雪村の作品に関しての特質や魅力については、このように画伝史や評論、研究等で今までに度々言及されてきた。この雪村画の特質や魅力の源泉には、もちろんそれ以前の伝統的な絵画があり、雪村がこれを学んだからこそ出現したとすることができる。しかし一方で、そこには過剰なほどの画家のサービス精神、絵を見る者を必ず楽しませるといふ、雪村の近代的とも言える作画意識が働いていたと思われる。そしてこれがまた、素



《踊る布袋》板橋区立美術館蔵

雪村展 - 戦国時代のスーパー・エキセントリック -

平成14(2002)年1月26日(土) - 3月3日(日)

10:00 - 18:00 平日の金曜日は - 20:00(入館受付は閉館の30分前まで)

- 【休館日】 毎週月曜日 但し2月11日(月)は開館 翌12日(火)休館
- 【入場料】 一般 800(640)円
- 大・高生 560(450)円
- 中・小生 240(200)円 ()内は前売・団体30名以上
- 【主催】 千葉市美術館
- 【協力】 日本航空
- 【企画協力】 浅野研究所

講演会

「雪村画の魅力の源泉をさぐる」

講師:小川知二氏(東京学芸大学教授)

2月9日(土)午後2時より(開場1時30分) 11階講堂にて 先着150名様まで

本展監修者による特別ギャラリートーク

2月23日(土)午後2時より 申込み不要 8階展示室入口にお集まり下さい

講師:山下裕二氏(明治学院大学教授)

担当学芸員によるギャラリートーク

1月27日(日)、2月13日(水)、16日(土) 午後2時より

8階展示室入口にお集まり下さい。

平成14年 特別展のご案内

春の特別展

The Essential ジ・エッセンシャル
逢坂卓郎、大塚聡、須田悦弘、渡辺好明

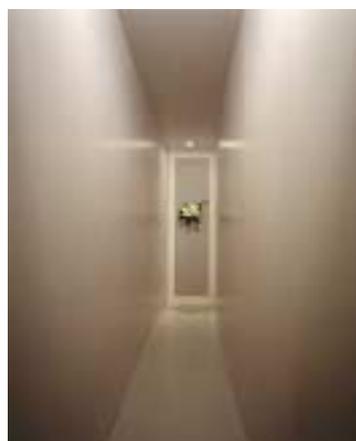
4月9日(火) - 6月2日(日)

この展覧会では現代日本の四人のアーティスト、逢坂卓郎、大塚聡、須田悦弘、渡辺好明の仕事を紹介します。これらのアーティストが我々に見せてくれる作品は、それぞれ光線、鏡、木彫、ロウソクの燃焼といったどちらかというプライマリー(原始的)な要素から出来上がっています。映像も音も使用されませんが、特別に刺激的なものは何もありません。また如何にも現代社会らしいメッセージやキャラクター性もなく、美術館とアーティストとの仕事として新奇なものや、小難しいものは何もないのです。むしろ私たちの日常生活の端々に垣間見られる当たり前の要素がアーティストたちの手によって呈示されるといったものでしょうか。

しかし、これらのアーティストは、その当たり前の要素、つまり自然のリズムと現象、物体の存在感によって、古来の美術が担ってきた最も初源的な機能、「最終的に感動をもたらすように私たち人間の感覚を揺さぶる」という単純で困難な目的を純粋に追求しています。今日様々な表現が登場して、その多様性は、「現代美術」の意味にも多様性を与えています。しかし現代美術もその本質の部分には、古来普遍の純粋なエッセンスを探り出すことが出来、その方向性を追求するアーティストたちをみることが出来るのです。



大塚聡《Untitled》
2001年
芝山アート展2001での展示



須田悦弘《泰山木・花》
1999年
原美術館(東京)でのインスタレーション

秋の特別展

「鈴木春信」展

9月14日(土) - 10月20日(日)

若い恋人達、母と子、さりげない日常...またそれに重ねられた絵巻、見立絵といった主題上の機知的な操作など、鈴木春信(1725?-70)は小さな画面の浮世絵版画の中に、詩的で洗練されたイメージと江戸っ子らしい洒落の世界を豊かに築きあげました。また春信の時代に木版画が鮮やかに色づいて錦絵が誕生したことは、当時の人々にとって衝撃的なメディア革命であったと思われます。色を操り、幾層にも魅力を重ねた春信の豊かな表現は、21世紀を迎えた現在もなお我々の目には驚きであり、また同時に深い安らぎを与えてくれるものであります。

春信は、錦絵創始期の第一人者として活躍した重要な浮世絵師ですが、その代表作品のほとんどが海外に所蔵されていることや、保存の難しさから日本での本格的な個展は1970年以来行われていません。シカゴ美術館、メトロポリタン美術館、大英博物館など海外の主要美術館にも協力を得、国内外に所蔵される春信作品の中から、質・状態ともに現在望みうる最高のセレクションにより、春信芸術の粋を伝えようという大規模な展覧会です。



鈴木春信《鞠と男女》
中判錦絵
千葉市美術館蔵



鈴木春信《見立太田道灌》
中判錦絵
ミネアポリス美術館蔵

2002(平成14)年 その他の企画

第33回千葉市民美術展覧会

3月9日(土) - 3月29日(金)

毎年早春期恒例の市民展も今年で33回目を迎えます。当美術館開館までは千葉県立美術館で開催されていましたが、開場を移して7回目の開催となります。日本画、洋画、書、彫刻、写真、工芸、グラフィックデザインの7部門それぞれの会員の作品、また公募による市民の力作が展示室の壁一杯に展示されます。受付は2月15日 - 17日。部門によって異なりますのでご注意ください。

主催:千葉市美術協会/千葉市/千葉市教育委員会/千葉市美術館/千葉市文化連盟

アンジェ美術館展(仮称)

6月8日(土) - 7月14日(日)

アンジェは、フランス西部、メーヌ川沿いの都市として古くから栄えてきた街。同市の市立美術館所蔵のコレクションから18世紀フランス絵画を中心に名品を選びすぐり紹介する展覧会。フラゴナール、シャルダン、ワトー、ブーシュ、アングルの作品をはじめ約70点を展示する予定です。

高村光雲展

7月16日(火) - 8月25日(日)

高村光雲といえば上野公園の西郷隆盛像や皇居前の楠公像。古くから親しまれている光雲(1852 - 1934)とその周辺の作家の展覧会です。

浜口陽三展

10月29日(火) - 12月23日(月/祝)

第二次世界大戦後の日本を代表する版画家であり、房総ゆかりの作家でもある浜口陽三の大回顧展です。浜口陽三は一昨年(2000年)に亡くなっており、没後初めての総合的回顧展になります。

アメリカから来た日本 - クラーク財団日本美術コレクション

2003年1月4日(土) - 2月2日(日)

アメリカでも屈指の日本美術の大コレクターであるビル・クラーク氏が所有している日本美術の里帰り展。絵画が中心に展示されますが、仏像なども含め100点あまりを展示する予定です。

展覧会の日程や名称は現時点での予定ですので、変更される場合があります。また、入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは次号以降で順次ご紹介します。

休館日 毎週月曜(祝日の場合はその翌日) 年末年始 展示替期間

開館時間 午前10:00 - 午後18:00 平日の金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

お問い合わせは 043 - 221 - 2311(代) これまでご利用頂きましたNTTハローダイヤルは3月末いっぱいまでご利用いただけなくなりますのでご注意ください。

URL <http://www.city.chiba.jp/art>

e-mail museum@city.chiba.jp

* 千葉市美術館では、今年も企画展と平行して数々のテーマを設定した所蔵作品展を開催します。どうぞご期待下さい。



磯田湖龍齋《夕汲図》

絹本着色 三幅対
各81.1×31.5cm
安永(1772-81)後期
署名「湖龍齋画」印章「正勝印」

安永・天明期(1772-89)に活躍した浮世絵師磯田湖龍齋(いそだ こりゅうさい)は、「雛形若菜の初模様」に代表される版画作品によって名声を得たが、肉筆画も高く評価され、殊に作画期の後半には集中して筆を執り、優れた作品を多くのこしている。

湖龍齋の成熟した画技の堪能される作品の一つで、主題は謡曲「松風」で知られる物語の見立絵となっている。須磨に三年の配流となった在原行平と、その地で寵愛を受けた海女の松風と村雨の姉妹の物語であり、謡曲によれば、行平が都に戻ってまもなく亡くなったことを聞いた松風と村雨は、恋しさのあまり後を追ひ、その墓標として一本の松が植えられたという。三幅対の掛軸で、行平の形見である烏帽子と狩衣がかけられた松樹の図を中に、左右幅には行平を偲ぶかように松樹に寄り慕う夕汲みの松風村雨が当世美人の姿で描かれる。三幅対の形式を巧みに用いてこの古典主題を構成しており、優美で繊細なタッチで仕上げられた画面からは雅びやかな趣がただよっている。

学芸員 田辺昌子

展示室で考える

展示ケースのしつこい汚れ！

美術館が皆さんから頂くご意見のひとつに「清掃」のことがあります。美術館というところはお客様が何しろ「美」と触れるためにいらっしゃることもあり、普段あまり不潔にはなりません。毎朝きれいに清掃もします。しかし千葉市美術館も閉館して6年目を迎え、方々にぼろがでてくるようになりました。ロビーや展示室のカーペットはあちらこちらでほつれが目立つようになり、古い汚れも落ちなくなり、大部黒ずんでいます。ホテル関係の人によると、往来の多いロビーのカーペットは、毎年替えるのが常識だそうです。が、財政難の文化施設故、そうもいきません。展示室の壁も、大部釘の痕が目立つようになってきました。これも全面的な塗り直しが必要なのですが、やはり財政難...

中でもことに深刻なのが作品が入る展示ケースの汚れでしょうか。よくお叱り頂くのですが、このガラスの汚れは、何といても作品と私たちの間に立ちほだかる邪魔ものなので、一層腹立たしいものです。もちろん職員も大変気にかけて、展示替えの度に必死になって拭いています。普通ガラスの汚れというのは、洗剤をシューッと吹きかけて布で拭けば簡単にきれいになるものですがこのガラス、ミュージアムグラスという高透過性ガラスのためか、はたまた他の要因か、懸命に拭いても拭いても油っぽい汚れが殆ど落ちない、それどころか拭き痕が一層汚らしく目立ってくる、困ったものなのです。まずは汚れの原因を明らかにしなければならぬのですが、ケースを設計した専門家にも分かりません。他の美術館ではガラスはこんな汚れ方はしないというから一層分からない。今のところ出来るのは、必死に拭いて汚れをほんの少しでも目立たなくすることでしょうか。どなたか、ガラスに詳しい方のお知恵を拝借できれば幸いです。

千葉市美術館

ハローダイヤル：043-227-8600 (3月31日まで)
ホームページ：<http://www.city.chiba.jp/art>
JR千葉駅東口より
徒歩約15分
バスのりば⑦より京成バス「大和橋」下車徒歩2分
千葉都市モノレール県庁前行「葦川公園」下車徒歩5分
京成電鉄千葉中央駅東口より徒歩約10分



【編集・発行】千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】2002年1月26日

【制作・印刷】株式会社プリンテックメディア